

Title	田口晶君提出の博士学位請求論文「オスマン帝国末期アラブ政治運動の諸相」の審査要旨
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	2007
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.75, No.2/3 (2007. 1) ,p.192(372)- 198(378)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20070100-0192

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

田口晶君提出の博士学位請求論文「オスマン帝国末期アラブ政治運動の諸相」の審査要旨

論文の概要と審査要旨

アラブは一つの民族であり、一つの国家をつくるべきだという考え方は、これまで疑いようのない自明のものとして受け入れられてきた。このアラブ民族主義の思想を歴史記述の面において定立したのはレバノンに生まれたアントニウスである。彼はその著『アラブの目覚め』のなかで第一次世界大戦末期、アラブの反乱軍によってダマスカスがオスマン帝国の支配から解放された際の喜びに沸く町の情景を次のように描写しながらアラブ民族主義に対する揺るぎない確信を語っている。

ダマスカスは身も心も浮かれて狂喜乱舞の渦に満ちた。それは市民にとって自由の実現の如く思われ、彼らにとってその自由とは、トルコの桎梏からの脱却だけに止まらず、同時に長年抱いた夢が実現したことを意味したものである。

しかしながら、アラブが一つの民族としてまとまり、国家を創っていくという理想は、アラブの人々が住む広大な地域的多样性によって、また一九世紀以降、アラブ世界の大半がヨーロッパ

の植民地、委任統治領、保護国として分断されたことによって実現しなかった。実際には二二の国に分かれた「諸国体制」こそ第一次世界大戦後から今に至るまでの現実であり、広域的・重層的なナシヨナリズムの構想と実際の国民国家建設の枠組みとの間には深い溝が広がっている。

このような理想と現実との乖離を見据えて近年では一九世紀以降の近現代のアラブ史を従来、圧倒的に優勢だったナシヨナリズム史観にとられず、アラブの人々が有する複数の重層的なアイデンティティ、帰属意識を峻別しながらみていこうとする動きがさかんである。こうした研究にはアラブの人々は決して統一的、単一の実在ではなく、またナシヨナリズムに対して一枚岩でなく、民族国家論も絶対的なものでないという主張が通底している。田口君の論文は以上のような動向に触発され、それをさらに発展させようとの意欲をもって執筆されたものである。

論文の構成は以下の章節からなっている。

目次

- 第一章 序説
- 第二章 「国民国家」とテクノクラート
- 第三章 対抗的公共圏の隘路
- 第四章 「盟約」というシニフィアン
- 第五章 汎イスラーム運動と「国民国家」
- 第六章 結語

参考文献

以下、各章の論述内容を要約しながら、その評価や問題点を述べることにしたい。

第一章「序説」は、一九六〇年代半ば以降活発化したアラブ民族主義に対する批判的な諸研究の流れを追い、後の章で論じられる問題の所在を提示する。研究史の部分ではナシヨナリズム批判に先鞭を付けた Zeine にはじまり、Haddad, Kaya, Hourani の研究書が取りあげられ、それらの内容が簡潔に要約される。これによってこれまでのナシヨナリズム一辺倒の研究とは違う新しい流れを知ることができる。ただ、研究史の整理としては個々の著作の逐語的な内容紹介に留まっており、もう少し諸研究に共通する問題点を洗い出して整理し、重要な概念については言葉を尽くして十分かつ綿密に説明する必要があるかと思われる。

この章のみならず全体を通じて時代の最先端を行く現代思想家が好んで使う「テロス」、「監禁の空間」などのターミノロジーが随所に散りばめられ、使われている。しかし、このような人の目を眩惑させてやまない絢爛たる言葉を田口君がどこまで咀嚼し使っているのか疑問に思われるところも少なくなく、問題の所在、分析方法が読み手の側に必ずしも十分に伝わっていない憾みがある。

この章ではむしろアラブ民族主義を批判的に見る諸研究を総

覧して全体的な視野から論争点を抉り出し、それらを大胆に提示する方がより適切であったと考えられる。すなわち、オスマン帝国の支配下にあったアラブの人びとは、誰もがアラブという民族的な自覚をもっていたとは限らず、オスマン帝国という国家に強い愛着を持つ者もいれば、シリアのようなアラブ世界を構成する地域にこだわる人たちも多かった。このように一九世紀後半以降のオスマン帝国末期においてアラブの人びとのアイデンティティ、帰属意識は複合的、重層的である。それゆえ民族国家という構想は必ずしも至上のものでなく、これと並行してさまざまな国家論がアラブの人々によって構想されていたことを指摘していく方がよかったと思われる。

名望家層、中間層に属するアラブのなかにはオスマン帝国の経済的な支配を嫌って積極的にアラブ民族主義運動の担い手になる者が多かった。しかし、オスマン帝国の支配体制のなかに身を置く官僚、軍人のなかには従来の帝国の枠組み、メンタリティを払拭することができず、それに縛られたオーストリア・ハンガリー帝国に倣った二重帝国論、それを発展させた多重帝国論、さらにアラブ世界の一体性は認めつつシリア、エジプト、イラクなどのそれぞれの地域性を重んじる分権論を構想する者も少なくなかった。またオスマン帝国のスルタンがイスラーム共同体(ウンマ)を統べるカリフでもあるという面をとらえてオスマン帝国を中心に置くパン・イスラーム主義的なムスリム国家論を提唱してアラブの再生を図っていこうとする人もいた。このようにオスマン帝国末期においてアラブの人びとが抱く

政治理念、国家論は多様である。彼らはオスマン帝国を否定的にみるか、肯定的にとらえるかの違いはあるものの、長い歴史のなかで重くのしかかってきた帝国の支配システム、国家理念の呪縛からみずからをなかなか解き放つことができず、それに縛られる形で動かざるを得なかった。田口君はこうした面に注目し、これまで正統とされてきたナシヨナリズム史観による歴史理解をひとまず振り払い、オスマン帝国が培ってきた政治的、文化的伝統を必ずしも否定しない四人のアラブを代表する官僚、軍人、知識人、政治家の軌跡をそれぞれ追いつながらアラブ・ナシヨナリストがめざすものとは異なる政治運動の諸相を見ていこうとするのである。

第二章「国民国家とテクノクラート」ではアラブ出身の軍人、行政官としてオスマン帝国に仕えたアリー・リダー・リカービーの揺れ動く帰属意識を明らかにする。リカービーは、第一次世界大戦の前夜、シリア、アラビア半島でアラブ民族意識が昂揚した際でもオスマン帝国の体制側に立つテクノクラートとして行動し、民族主義の思想、行動とは距離をおいていた。このことは、彼が県知事としてメディナに赴任した際、民族主義の象徴として衆目が一致して認めるメッカのシャリーフと鋭く対立したことであらわれている。

しかし、第一次世界大戦期にアラブ反乱が起きると、リカービーも遅ればせながらこれに参加しようと青年アラブ協会に入する。だが、その関与の仕方は反体制の側に身も心も捧げる

というものでなく、最後までオスマン帝国に仕える軍人として任務を放棄することがなかった。この意味においてリカービーは、オスマン帝国の軍人、行政官としてのメンタリテイと行動を最後までぬぐい去ることができず、彼をアラブ・ナシヨナリストとみなすことはできない。これが田口君のこの章での結論である。

確かにリカービーのように考え、行動せざるを得なかったアラブは少なくなかった。しかし、そうした状況を史料的にどこまで実証できたのかという点になると、説得力が弱いように思われる。田口君が拠る史料はあくまでも第一次世界大戦に際して対オスマン帝国作戦をにらんでイギリスが張りめぐらした諜報機関が作成した英文史料である。リカービーの心の襞に分け入るアラビア語のそれではない。この点でリカービー自身がどう考えていたかは、推測にとどまる。

第三章「対抗的公共圏の隘路」ではダマスカス出身の指導的なアラブ知識人クルド・アリーの軌跡を追う。青年トルコ人革命後、オスマン帝国はトルコ民族主義を掲げ、それをトルコ人以外の諸民族にも強制して均質な「国民」を創出していこうとした。これに対してアラブの人々は対抗的ナシヨナリズムでもって応じた。クルド・アリーはこの運動の中心人物で、文化的には雑誌『ムクタバス』を刊行してアラブ意識の喚起につとめ、政治的にはトルコ民族を主体とする中央集権体制の実現をめざす「統一と進歩委員会」に対抗してアラブの自治、地方分権を

めざす活動に奔走した。クルド・アリーの意識と行動の根底には、アラブはトルコ人の支配によって自分たちの文化、政治が周縁化したという危機意識が強く、これをはねのけるため「対抗的公共圏」を創っていかうとしたのである。

しかし、こうした彼の活動は第一次世界大戦がはじまると修正を迫られる。一九一三年に開催された「アラブ会議」は、地方分権をめぐる内部的に紛糾、結果的にトルコ人が主導する中央集権体制を許した。さらにオスマン帝国は、英仏に対して挙国一致で戦つていくためジハード（聖戦）を呼びかけた。これによつてアラブの人びとの間にパン・イスラーム主義の影響力が強まり、クルド・アリーのシリアに重きを置く地域主義的なアラブ民族主義は生彩を失つていった。

第一次世界大戦後のクルド・アリーの活動もアラブ・ナシヨナリストとはくれない面をもつ。その姿勢には委任統治をおこなうフランスに対する共感があり、強烈な民族意識をそこに見いだすことができない。こうした状況を田口君は、クルド・アリーの「転向」と表現する。確かにクルド・アリーの思想と行動にはオスマン帝国であれ、フランスの委任統治政府であれ、時の政治権力、その国家的枠組みの呪縛を振り切れない点が目立つ。このかぎりにおいてそのナシヨナリズムは限界をもつ。これが田口君の主張である。

この章でとくに興味を引くのは「対抗的公共圏」という概念である。田口君はこのまったく新しい造語ともいえる言葉について詳しく定義していない。ただ、文脈から判断してそれが、

シリアのアラブに対して押しつけようとしたオスマン帝国の文化政策、支配体制に反発するクルド・アリーが構想した独自の文化・政治圏の意味だということは理解できる。しかし、その具体的な中身となると、十分に説得力のある事実に欠けるように思われる。これを補うためにはクルド・アリーが編集に携わった雑誌『ムクタバス』、さらに彼自身が著した『回想録』、『シリア地誌』などのアラブ史料をもつと丹念に読み込んでいく地道な作業が必要のように思われる。

第四章「盟約というシニフィアン」は、エジプト出身のチェルケス系軍人で陸軍大学においてエンヴェル・パシャの一年後輩だったアズイーズ・アリー・ミスリーの思想と行動を扱う。彼は当初、サロニカに師団本部がある第三軍に配属され、そこでの青年トルコ人運動に共鳴し、「統一と進歩委員会」の有力メンバーとして活動した。

しかし、第一次世界大戦がはじまり、盟約協会という結社をつくると反トルコのな旗幟を鮮明にしていった。この結社は、その戦鬪的性格と秘密性からこれまでアラブ民族運動のもつとも先鋭的な組織とみなされてきたが、田口君はこうした通説を批判し、メンバーのなかにアラブ以外にトルコ、アルバニア、クルドといった人びとが多く加わることから盟約協会がめざしたのはアラブ国家ではなく、オーストリア・ハンガリー帝国に倣った二重帝国、あるいはそれをさらに膨らませた多重帝国でなかったのかという見解を提示する。これはふつう「東地中海

国家」構想と呼ばれ、地域的にはトルコ、アラブ、アルバニアのみならずエジプト、スーダン、リビア、チュニジアといった、かつてオスマン帝国が支配した版図をカバーする分権制にもとづく連邦国家案である。

この構想をより深く知るには異同がある複数の綱領の分析が不可欠である。このため田口君はミスリーからの聞き書きを含む *Birru*, *Khadduri* などのアラビア語史料、また盟約協会とは思想を異にする青年アラブ協会の有力メンバーが書き留めたミスリーに関する史料などを読んで盟約協会の国家論の復元・再構成を試みる。しかし、記事が断片的なこともあって明確な連邦国家についてのイメージを必ずしも引き出せなかった憾みがあると言わざるを得ない。しかし、ナシヨナリズムに根ざした民族国家論に対置される多重帝国論としての「東地中海国家」構想の重要性が提起された意義は大きい。この章で使われるアラビア語史料は相当数に上るが、それぞれの史料が書かれた動機、背景、作者など書誌情報を盛り込んで書いたならば史料的な制約があるなかで現段階において何が分かり、何が不明なのかはつきりして叙述に厚みが出てきたと思われる。

第五章「汎イスラーム運動と国民国家」ではエジプトの政治家アブドゥルアジャズ・ジャヤーウィーシユが取り上げられる。一八八〇年代初頭のオラービー運動から第一次世界大戦後の一九一九年革命の時期におけるエジプトの政治的な動きは、「エジプト人のためのエジプト」というスローガンによく示される

ように、ワタニーヤ、すなわちエジプトという領土空間を単位とする一国主義的なナシヨナリズムによって説明されることが多い。しかし、田口君はこのような通説的な理解に再検討を迫る。

田口君はエジプトがムハンマド・アリー王朝の下で事実上の独立国家をつくっていたにもかかわらず、国際法的にはオスマン帝国の宗主権下にあったことを重視し、これに起因するオスマン主義的な国家論が当時のナシヨナリズム運動に投影していたと考える。こうした問題関心から彼が注目するのは、ムスタファ・カーミル亡き後、民族主義政党ワタン党の実権を握ったアブドゥルアジャズ・ジャヤーウィーシユの活動である。彼は党の機関誌『リワー』の編集人として当時エジプトを軍事占領下に置いていたイギリスと、その傀儡と化していたムハンマド・アリー王朝に対する攻撃の論陣を張った。

ジャヤーウィーシユは、こうした論争の過程を通じて次第にエジプトをかつてのように属州としてオスマン帝国に復帰させ、スルタン・カリフを戴くムスリム国家に再統合していこうとする考えを強めていった。このような構想は象徴的なスローガンとしては「エジプト人のためのエジプト」から「ムスリムのためのエジプト」へ、国家論としてはパン・イスラーム主義的な政治共同体への転換をめざすものであった。こうしたジャヤーウィーシユの言説を通して田口君は従来、一国主義的なアラブ民族主義（ワタニーヤ）として規定されてきたエジプトの政治体制に対する見方に疑問を投げかけ、その修正の必要性を説くの

である。

以上、各章ごとの要約を述べ、それぞれの問題点について指摘してきたが、最後に第六章「結語」で田口君が述べていることを踏まえながら全体的な講評をしておくことにしたい。

この論文を通読して高く評価できる点は、これまでのナシヨナリズム史観にがんじがらめに縛られてきた近現代アラブ史の記述の仕方に痛烈な批判を加え、四〇〇年余りもアラブ諸地域を支配してきたオスマン帝国の枠組みを重視し、それを客観的に見直して近現代のアラブ史を再構成していかうとする意欲的な試み、姿勢である。研究史の整理の仕方はすでに述べたように注文すべき点が多々あるが、貪欲に最新の研究の流れを吸収しようとする態度、記述が随所にあらわれ、高い評価を与えることができる。

アレント、フーコ、ベンヤミンといった現代思想家の書を耽読し、それをアラブの思想、政治史研究のなかに生かそうとする実験的な企ても、その引用、使い方があまりに感覚的に過ぎて論理的に意味が十分に伝わってこないところがしばしば見受けられるものの、これからの研究を担い、またフロンティアを開拓していかねばならない若い世代の研究者者として一度は経験しておかねばならない通過儀礼であり、許容できる。オスマン帝国の国家的枠組みを全面的に否定せず、帝国崩壊後にアラブが構築すべき政治的な枠組みにそれをどう生かそうか模索した四人のアラブの群像をナシヨナリズム史観にとらわ

れず、彼らのそれぞれの政治運動の諸相を描写していかうとする手法も新鮮なアプローチである。ただ、あえて注文をつけるとすればアラビア語で書かれた第一次史料を渉猟してもっとリアルに、徹底的にそれぞれの人の生きざま、考え方を書き込んで欲しかった。そしてこれを踏まえて最後に四人の政治理念、国家論を比較し、ナシヨナリズム史観とは異なるオスマン帝国を視野に入れたアラブの多様な政治観を田口君なりに整理すべきだったと思われる。

もつとも彼が力説するオスマン帝国史とアラブ史という自己完結的な枠組みを超えようとする作業は多大の困難を伴う。近現代のアラブ史をオスマン帝国の枠組みのなかでやっていかうとするとき、トルコ民族主義との関係は避けて通れないが、アラブ民族主義とは一線を画する多様な国家論がトルコ民族主義の思想、政策とどこで接点をもつのか、これを見つけその史料を読むだけでも膨大な時間を要する。

田口君の視点にとつて重要なトルコ民族主義の思想、政策は、ジャ・ギョカルプ、アフメト・アアウル、ユースフ・アクチュラに代表されるパン・トルコ主義でも、またエンヴェル・パシャによつて推進された統一と進歩委員会による中央集権化政策でもない。むしろミスリーの掲げた多重帝国論、「東地中海国家」構想の是非を検討するためにはアリー・ケマル、アフメト・フェリトなどの分権主義的なトルコ民族主義が参照されるべきである。しかし、これらの思想の水脈もプレンス・サバハッティン、ジェナプ・シャハバッティン等に源をもつ蕩々と流

れる奥の深い伝統がある。しかし、これらの思想は青年トルコ人革命、トルコ共和国の建設のなかで少数意見として無視され、現在のトルコの学界のなかにあっても十分な光が与えられず、未発掘なままである。

このように田口君の前には乗り越えなければならぬいくつかの壁が立ちはだかっているが、提出された論文にはそれらの難しい作業をひとつひとつやり遂げていく能力、学識が十分に備わっていると認められる。また、近現代アラブ史研究においてナシヨナリズム史観にとらわれない仕事も日本にもようやくやぐ出現したことは斯学に一石を投じる貴重な成果だと思われる。こうした諸点に鑑み、審査員一同は、田口晶君に博士(史学)の学位を授与することが適当と判断するものである。

論文審査担当者

主査 慶應義塾大学文学部教授・文学研究科委員

坂本 勉

副査 慶應義塾大学商学部教授

湯川 武

副査 東京大学東洋文化研究所教授

長沢栄治